指　導　課

「新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト」千葉県の取組
～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて～

県教育庁教育振興部指導課

1　プロジェクトの概要

県教育委員会では，平成27年度から3年間，独立行政法人教職員支援機構に置かれた次世代型教育推進センターからの委嘱を受けて，「新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト」（以下「プロジェクト」という。）に取り組んできた。このプロジェクトは，新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善に向け，研究指定校における授業実践研究や教員の校内研修を推進するとともに，その成果を普及していくことを目的としたものである。千葉県の他にも，全国で11都県が委嘱を受けて本プロジェクトを推進してきた。

2　プロジェクトの推進体制連絡協議会

県教育委員会では，このプロジェクトを，「ちばっ子『学力向上』総合プラン」の中に位置付け，我孫子市立我孫子第一小学校，我孫子市立我孫子中学校を研究指定校として開始し，翌28年度からは，県立我孫子東高等学校を加え，小・中・高等学校で，校種を越えた連携を図ってきた。（本年度は新たに4校を研究指定校に加え，全7校で進めてきた。）また，本プロジェクトを推進する連絡協議会を組織し，次世代型教育推進センター，千葉大学教育学部附属教員養成開発センター，県総合教育センター，県教育事務所等の関係機関との連携・協力を図り，研究指定校への働きかけを行ってきた。

3　プロジェクトの推進

⑴研究指定校による実践研究

各指定校では，それぞれの研究主題に基づき，創意工夫を重ねながら「主体的・対話的で深い学び」の実現に迫る取組を模索しながら実践していった。実践を繰り返す中で，「自校のアクティブ・ラーニングはこれだ」と言える，独自の授業改善の視点や方策を明らかにすることを目指してきた。各校が共通して意識的に行ってきたのは，「育成を目指す資質･能力」を明確にし，授業改善の視点や方向性を，児童生徒の学ぶ姿を拠り所に追究し続けたこと，そのために教師同士が互いに学び合う場である校内研修の在り方を見直していったことである。これらは，新学習指導要領の中でも重要なポイントとして挙げられている。

⑵セミナー開催による成果の公表・普及

我孫子中校内研修会
（H 28.10.3）

最近2年間は，8月に独立行政法人教職員支援機構との共催で本プロジェクトに係るセミナーを開催し，昨年度は130名，今年度は214名の参加者があった。セミナーでは，各指定校の研究主任が研究成果を発表し，参加者との意見交換を行うプログラムも設定した。

＜セミナー参加者のアンケートから＞
・実際にどのような授業を行い，失敗なのか成功なのか，それはどうしてなのかを丁寧に説明してもらい，自分の授業に生かせるイメージがわいた。
・生徒の学びに着目した取組により，他教科の先生とも同じ授業について協議し，深め合うことができることがよくわかった。
・目指す児童像をより具体的に考え直していかなければ授業改善は進んでいかないのだと実感した。

⑶公開研究会実施による成果の公表

プロジェクト三年目の本年度は，先進研究指定校である我孫子の３校（以下「３校」という。）それぞれが公開研究会を実施し，３校合わせて 480 名余りの参加があった。授業は，ホワイトボードを使って思考を可視化する場面，互いの考えを傾聴し合い議論を深めていく場面，タブレットを操作しながらプレゼンテーションをする場面，図鑑や本など多様な情報を調べて比較検討する場面など，多岐に渡る展開がなされていた。その中でどの授業にも共通していたのは，最後に自分の考えをまとめて本時の学習を振り返る，リフレクションの場が設定されていたことである。このような学習の積み重ねが「主体的・対話的で深い学び」の実現に，そして児童生徒の「資質・能力」の育成につながっていくことが，授業実践研究の成果として分かってきた。また，校内研修の成果として，「授業のどこで学びが深まったのか」など，児童生徒の学ぶ姿に着目することで，教員同士は校種や教科の枠を越えて授業について協議し合うことができる，という結論に辿り着くことができた。これにより，各校とも授業後の協議会では，本時の児童生徒の学ぶ姿を基にして，教科や校種を越えた幅広い視点から意見交換をしていくことができた。

４　プロジェクトの成果と今後に向けて

⑴授業改善に向けた取組のモデルを提示

「主体的・対話的で深い学び」の実現は，教員と学校との創意工夫に基づく不断の授業改善の営みである。本プロジェクトで，３校がそれぞれ提案してきた授業改善の実践や校内研修の在り方は，今後，県内の全学校が目指す取組の，一つのモデルになるものと考えている。

⑵児童生徒・教員の変容

３校の児童生徒・教員にアンケート調査を行った。「相互の意見交換を通じて自分の考えを深めたり広げたりできているか」の問いに，「当てはまる」と回答した児童生徒は，昨年度 29.0％から今年度は 36.1％に上昇した。また「課題解決や探究型の学習活動を授業に取り入れているか」との問いには，36.9％の教員が「当てはまる」と回答し，昨年度の 24.1％を大きく上回る結果であった。児童生徒，教員ともに授業への意識が大きく変わってきたと言えるだろう。今年度で３校の指定は終わるが，今後，県教育委員会では，新たに研究校を指定し，本プロジェクトを継続，発展させていく予定である。

小学校編

地域とつながる「総合表現活動」を位置付けた国語科の授業づくりについて

我孫子市立我孫子第一小学校

1　はじめに

我孫子市は利根川と手賀沼という二つの水源に挟まれ，鳥の街としても知られる。市街の中心に位置する本校は創立145年を迎える歴史と伝統のある小学校である。

平成27年度より，文部科学大臣の諮問を受けて立ち上がった教職員支援機構の「新たな学びに関する教員の資質・能力向上のためのプロジェクト」実践フィールド校に指定され，児童が主体的・対話的で深く学ぶための方法について，三年計画で研究を進めてきた。

今年度は本プロジェクトの三年目を迎え，11月には公開研究会を行った。ここでは，主に今年度の研究の概要について紹介する。

2　研究の概要

⑴研究主題の設定

児童が自ら課題を見出し，主体的・対話的に学ぶことができる国語科学習指導
～“地域とつながる総合表現活動”を位置付けた単元づくりを通して～

これからの時代を生きる児童にとって，自ら考え，自ら表現することができる能力は必要不可欠である。本校では，「実社会・実生活に生きてはたらく表現力」の育成を目指して，平成28年度より「総合表現活動」を取り入れた授業を創り出してきた。「総合表現活動」とは本校独自に考え出した言葉で，一言で言うと「教科等横断的な視点で単元構成をし，その中で『生きてはたらく表現力』を育成する活動」のことである。本校では，国語科と生活科・総合的な学習の時間を関連させ，総合表現活動を位置付けた単元構成を行っている。

また，今年度は「地域とつながる総合表現活動」として，より地域教材を生かして表現力を高められるように活動を設定している。

⑵研究目標・仮説の設定

研究主題を基に，研究目標を以下のように設定した。

児童が目的意識・相手意識を明確にもち，自ら課題を見出し，主体的・対話的に学ぶことができる国語の単元や授業のあり方について，授業実践を通して明らかにする。

この目標達成に向けて，手立てを考えて検証していく為，全体仮説，具体仮説１・２を以下のように設定した。

全体仮説

“地域とつながる総合表現活動”を位置付けた単元構成をし，国語科の学習において，児童が主体的・対話的に学べる手立てを工夫することで，児童は学びを深めることができるだろう。

具体仮説１のポイント

・明確な目的意識・相手意識をもたせる。
・表現力についての課題意識をもたせる。

具体仮説２のポイント

・児童が友達と共に解決したいと思うような言語活動を設定する。
・互いの考えを理解できるような手立てを工夫する。

３　研究内容

⑴全体研修の充実

本校の職員は，研修に対して高い意欲をもって取り組んできた。全体研修を充実させ，疑問に思っていることや，確認したいことをその場で話し合うことで，ねらいを明確にして研究を進めることができた。

⑵授業研究による授業力の向上

公開研究会に向けて授業力向上の為,「地域とつながる総合表現活動」を位置付けた単元構成をし，６月に授業研究を行った。

授業研究の反省から，生活科・総合的な学習の時間の充実が必要であることや，１時間１時間の授業においても更なる学びの深まりがあるようにすること等の課題を見出せた。

⑶公開研究会に向けて

６月の授業研究で出た成果と課題を基に，11月の公開研究会の授業づくりを行った。仮説１・２の解釈がより明確になり，児童が主体的・対話的に学びを深められるように，各学年で手立てを工夫することができた。

学校・地域とのつながりの中で思いを育む

学校の先生へのインタビュー【１年生】

手賀沼の不思議調べ【特別支援学級】

相手意識・目的意識・課題意識をもった真剣な話し合い活動

頭を寄せ合い共に文章を推敲【４年生】

付箋・色違いカードを活用した話し合い活動

PR映像の内容を決める話し合い【５年生】

４　おわりに

児童にとっての主体的・対話的で深い学びを実現するために，本校では仮説に基づき，単元構成や手立てを追究することができた。授業時間以外にも，児童同士が学習課題について目を輝かせて話し合う姿が様々な学年で見られるようになった。児童の目の輝きを更に引き出せるよう研究を重ねていきたい。

中　学　校　編

生徒と共に創り上げる我孫子中スタイル
～我孫子ラウンドテーブルの意義～

我孫子市立我孫子中学校

1　はじめに

全校生徒935名の大規模校である本校は，三大伝統として「挨拶・清掃・歌声」を掲げており，生徒会や委員会活動を中心に生徒が主体的に活動している。平成27年度より，信州大学教育学部の青木一先生の御指導の元で，授業研究と職員研修を進めてきた。

目指す生徒像：「新時代を生きるために，自ら学び，判断し，表現する生徒」
目指すアクティブ・ラーニング型授業：「生徒と共に創り上げる我孫子中スタイル」

2　研究の体制

⑴「学習内容」からのアプローチ（教科部会）

これまで，教科での研究の成果が個人の指導力には結び付くものの，教科部会としての蓄積とはなりにくいという課題があった。そこで，「教科で目指す生徒像」を設定し，各教科で育む資質・能力を明確化した。また，教科で指導案を作成し，指導案中に「授業の見どころ」を明記した（図1）。

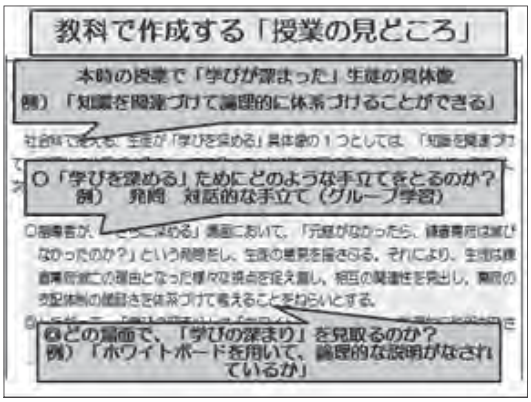

図1　授業の見どころ

生徒と共に授業を創り上げるために，教科部会として「生徒にどのように学んでほしいか」を想定することで，より実態に即した指導が可能となると考えた。

⑵「学び方」からのアプローチ（我孫子ラウンドテーブル）

これまで本校の研究授業後の協議会は，教科のみで行っており，生徒の教科横断的な資質・能力を育むための体制は十分ではなかった。そこで，「生徒が何をどのように学んでいるかを見取る」ことを授業観察の条件として考え，教科の枠を取り払い，協議会「我孫子ラウンドテーブル」を実施した。「ラウンドテーブル」とは円卓を意味し，立場や教科を越えて対等な関係で話し合うことを目的としている。このように「生徒の学び」に注目することは，他教科の指導方法だけでなく，授業づくりの視点を学ぶ機会ともなる。グループの人数やテーマなど，協議の方法を見直しながら，実践を進めてきた。

3　我孫子ラウンドテーブルの具体的な方法

⑴目的

「授業の見どころ」（図1）で事前に「学びが深まってほしい」と想定した点について，学びが深まることが実現されていたか，なぜ学びが深まっていなかったのか，その要因を探る。また，参加者の明日の授業に，どのように何を生かしていくのかについて提言することで，参加者それぞれが「深く」学ぶことをねらう。

⑵使用するもの

２色の付箋（赤・青）・拡大指導案（A３版でグループ数分用意）・ホワイトボード（グループ協議用）・ボードマーカー

⑶テーマの設定例

・思考の揺れを生むための工夫とは？
・学びを深めるための学習過程の工夫とは？
・学びを深めるための対話的な活動の工夫とは？

⑷進め方

事前に参加者で４名程度のグループをつくり，ファシリテーター（本校職員・指導主事）を中心に話し合いを進めていく。

①４名程度のグループに分かれ，「生徒を主語にして」付箋を記入する（参観中に行う）

赤…学びが深まったところ

青…学びが停滞したところ

②アイスブレークで，グループで意見交換ができるような雰囲気づくりを行う

③グループごとに，「学びが深まってほしいところ」について，それぞれが見つけた「生徒の学びが深まっている場面」を引き出す手立て，要因を話し合う（**写真１**）

④「学びが停滞した場面」，その要因を話し合う

⑤参加者それぞれが明日の実践に生かせるような提言をする（**写真２**）

⑥研修だよりで，他の授業の提言を紹介する

４　取組から見えてきたこと

⑴提言にまとめる意義

生徒と同様に，職員もまた「深く」学ぶことが必要である。提言にまとめるということは，話し合った成果について，単に職員が授業を批評するのではなく，「今後の自分自身の実践にどのように生かすか」考えることにつながると考える。そのために教科の専門的な言葉ではなく，汎用的な言葉で表現することで，全教育活動を通じて，職員の「学び合い」が実現できる。

写真１　グループでの協議

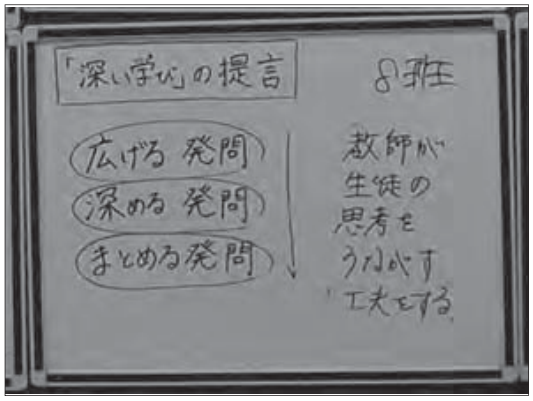

写真２　発問の在り方への提言

⑵我孫子ラウンドテーブルの成果と課題

・学年や教科に関係なく，授業を自由に参観する雰囲気が強くなった
・授業以外の場面でも，生徒の資質・能力の育成を意識する姿勢が強くなった
・全体での協議会の後，すぐに教科部会が開かれるなど，話し合いの場面が増えた
・ラウンドテーブルのファシリテーターの姿から，授業者に求められる視点が見えてきた（時間を操る「舵取り役」であり，生徒の発言や表現を促す「コーディネーター」）
・PTA だよりで，取組が紹介されるなど，「チーム我孫子中」の協力が強くなった
・取組の量的な検証が十分ではない
・研修を日常的なものにしていく必要がある

高等学校編

我孫子東高等学校のアクティブ・ラーニングとは

県立我孫子東高等学校

1　はじめに

本校が実践フィールド校として研究指定を受けおよそ二年。初年度は何をどうすればよいのかわからず不安を感じながら苦悶する日々だった。実践の先進校である我孫子第一小学校・我孫子中学校に倣うとともに，県教育委員会・独立行政法人教職員支援機構並びに関係各所から指導・支援をいただきながら試行錯誤を繰り返してきた。

突如現れた「アクティブ・ラーニング」という言葉への漠然とした不安を払拭することに時間はかかったが，研修を重ねるごとに浸透していく授業改善の意識と教職員同士の団結を感じ，心強く心地よい時間となった本校の実践を紹介していく。

2　実践内容

⑴研究主題

研究を進めるにあたり，校内組織として各教科から代表者を募り研究推進委員会を発足した。生徒の実態や本校の教育方針・努力目標をふまえ，研究主題を「新たな未来を築くために，自らの力を育み（基礎学力），自らの能力を引き出し（コミュニケーション能力），主体的・協働的に学ぶ生徒の育成～基礎的・汎用的能力を育成するために～」と設定した。

また，研究の内容として，「授業錬磨の公開日」等における研究授業の展開と研究協議を柱とし，各種研修会等への参加及び情報共有を通して生徒の主体的・協働的な学びへの指導手法や指導形態の研究を推進し，日々の授業にとり入れつつ授業改善を図ることとした。

⑵生徒の実態

本校生徒の実態として「学習に対する強い不安感」「対人関係スキルの不足」の２点が挙げられる。学習に対する失敗経験・躓きから生まれる苦手意識が意欲の低下につながるという「学習の負のスパイラル」に陥ってしまっている生徒が多いこと，自分の意見を正しく伝えられないことや相手の意見を正しく受け止められないことから，協働的な活動が苦手な生徒が多いことが生徒・職員へのアンケートから確認することができた。

⑶身に付けさせたい学力

生徒の実態を把握した上で，各教科・科目の目標や知識・技能の習得と合わせ，共通の授業で身につけさせたい力を検討し以下のように決定した。

・自分を表現する力
・相手を理解する力
・みんなで継続する力

この三つの力を生徒・教職員が共通認識し取り組むために，教室の全てに掲示した。

⑷授業実践

各教科の研究授業の指導案・展開を通して，以下の共通事項が挙げられる。

①具体化すること
②視覚化すること
③自力解決のための支援をすること
④実体験を伴った学習
⑤少人数グループでの学習
⑥教材の選定（興味を抱く）
⑦日常生活とのつながり

⑧導入時の工夫

これらの共通事項は，生徒一人一人に教材や課題への興味を抱かせ，自力で解決するための支援があり，他者と協力しながら課題を解決する経験を積むことを目指している。このことから，生徒の学習への目覚めを狙っているものと考えられる。学習に対して壁を感じている生徒の不安を解消する手立てとして，具体的・視覚的・体験的な教材を活用することで，学習内容をわかりやすくする授業づくりに努めている。また，グループ活動を取り入れることで，上手に人間関係を築くことができない生徒の伝える力・聞く力を養うことを狙いとしている。生徒の現状を把握し，身に付けさせたい能力を育むために，教科の特性を生かしながら日々授業改善に努めている。

3　成果と課題

上記の通り研究実践を通し，教職員の中に主体的・協働的な学びにつながる指導手法の導入や指導形態の工夫が多く見られるようになった。単元の中にホワイトボードを活用したグループワークを計画的に実施する様子も増え，言語活動を活発に行う学習形態を導入したり，プロジェクターやタブレットなどのICT機器を駆使したりと新たな授業の形が見受けられ，授業改善の意識や関心が高まった。さらに，教科の垣根を越えた職員間で，生徒の学習活動に対し意見交流する場が増えた。また，若手教員研修チームが積極的かつ建設的に活動している。その中で授業改善を取り上げることも多くあり，相互に授業を参観し合い，他教科の授業からも発見や刺激を受け授業改善に繋がっている。生徒理解は勿論，知識や経験の共有を図ることができている。

授業実践について振り返ることや新たな工夫を実践するために授業計画をすることを始まりとして，実践することで発見があり，成果や改善点を踏まえて新たな工夫を計画するという循環過程が本校の授業全体に生まれている。今後も授業者一人一人が成果と課題を見出し，意見交流しながら実態の把握（生徒の状況・学習環境）を含めたこのサイクルを止めることなく継続していくこと，教育環境の整備も含め，授業改善・向上に努めていくことが肝要である。また，教師の授業者としての工夫のみでなく，生徒の「学習者としての姿勢」を育むことにも留意したい。

授業者全体が生徒の実態を把握し，身に付けさせたい学力を明確にし，各教科において個性や教材を生かした魅力溢れる授業づくりに努めている。その成果として生徒を対象とした授業アンケートにおいて授業に対する肯定的意見の増加が確認できている。生徒の学びへのモチベーションアップが教職員のモチベーションアップにも繋がり相乗効果が生まれている。本校の授業実践において，いかに生徒の学びへの関心を高めるか，そしてその関心を保持させるかが，大切な要素である。

4　おわりに

手探りの中少しずつ，少しずつ進めてきた本校の実践であるが，進めるほどに日常の教育活動を全体で振り返り，反省し，改善するという当たり前の積み重ねと繰り返しであることに気付かされた。生徒・職員の変容に価値と自信を見出し，この研究実践を「点」にせず「線」にしていく。そして，職員がより一層連携し，その「線」を「面」にして教育活動に取り組むことができるよう，今後も研究活動を継続していく。